

＜ もくじ ＞	
1. 2018年総会・第17回大会報告	1～3
2. 秋の連続講座のお知らせ	3
3. 研究会からのお知らせ	3～4
4. 各研究会の概要報告	4～6

1. 2018年度定時総会・第17回大会報告

6月23日(土)、駒澤大学1号館202教室で開催されました2018年度定時総会・第17回大会の報告をいたします。

＜第一部 一般社団法人シニア社会学会総会＞

袖井孝子会長の挨拶に続いて、総合司会の森やす子理事より、議長に皆川靱一理事の推薦があり、満場一致で承認されて議事に入りました。第一号議案から第4号議案までの報告と説明があり、各議案とも満場一致で承認されました。また今年度は第5号議案として役員改選案が承認され、別室での新理事会の後、袖井孝子会長、濱口晴彦副会長の再任、神野毅 NPO法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ会長の当学会副会長就任、並びに事務局長が武者忠子理事から長田攻一理事に引き継がれたことが報告されました。

＜第2部 I 会員からの提言＞

大会午前の部に入り、長田理事の司会で、2018年度は「第3期3ヶ年計画」の研究テーマ「持続可能な超高齢社会をめざして」の最終年であることから、「会員からの提言」がなされました。



碓正義氏の提言の要旨は、現在の経済のシステムは、人間の際限ない欲望を原動力にして発展させてきた社会は荒れ果てた国土を残していくとし、欲望コントロールの価値を重視する社会創造のためのマクロな視点での幾つかの提言の後に、新自由主義に代わる経済原理を探し求めたケイト・ラワースの著書『「ドーナツ経済学が世界を救う」～人類と地球の為のパラダイムシフト～』を参考文献として紹介されました。格差や食糧問題などの社会的土台を内側とし、気候変動などの環境制約を外側とするドーナツ型のイメージで、人類が豊かな社会を実現するための未来の経済モデルを探る内容です。

安田和紘氏は、超高齢社会、人口減少社会では、国に任せるよりは自分たちでできることから始めていくことが重要だとし、ご自身の居住するあざみの団地の住民組織を例に、身の廻り30cm(安田氏の表現)の領域での緩やかな人間関係のコミュニティ形成について紹介されました。コミュニティ共創の鍵は、短期輪番の管理組合・自治会役員就任、プライバシーに踏み込まない暗黙のルール、多様性を求めること、サークル活動の詳細が誰でもわかる仕組みづくり、住民の自発性を促すためのきめ細やかな配慮、コーディネーターとなるキーパーソン存在、集会所という場の存在も大きいと述べられました。コミュニティの創造のためのポジティブできめ細やかな挑戦は、高齢化した集合住宅におけるソーシャルキャピタルの創造に必要な活動の鍵を具体的に示しており、他のコミュニティでも実現可能なヒントを得られる提言内容でした。



<第2部 II 基調講演とパネルディスカッション>

昼食を挟んで行われた大会テーマ「支え合うコミュニティの共創—格差と分断を越えて—持続可能な超高齢社会をめざしてⅢ」をめぐるシンポジウムが行われました。

袖井会長の趣旨説明、講師紹介に続いて、高橋紘士講師より、基調講演『コミュニティは「格差と分断」のソリューションたりうるか～「住まいと住まい方」の視点から』がありました。まず、格差と分断を生じた日本社会の時代の趨勢（特に1960年



70年代、高度経済成長社会の到来と終焉、失われた20年問題、グローバル資本主義の終焉、成長経済型社会システムの破綻、国家財政の逼迫の中で政府の間違った対応等…)について話され、日本は租税負担率が先進国最低であると指摘されました。また、高齢多死社会となる2040年には、人口減少、地域ごとの多様化、社会保障制度の前提のゆらぎが想定されるとして、本題に入られました。1970年代には映画《恍惚の人》で老人問題について既に警鐘が鳴らされており、まさにこの時代に「排除・隔離モデル」（わけて、あつめて、しばる）の下で建てられた病院施設の負の遺産への対抗軸を求めることが今後日本全体のソリューションになるとして、コミュニティの在り方について説明されました。これからは、高齢者対策にのみフォーカスするのではなく多様な人びとの本人の選択と自発性を尊重し、「包括モデル」（まげて、ちらして、つなぐ）の下で「自立と依存の混在」を目指すとともに、横断的な社会保障が必要で、医療と福祉の連携が欠かせない。その中で「住まいと住まい方」は地域共生社会実現に向けた中核となること、更に、住宅セーフティネット制度と生活困窮者自立支援法の枠組みとして、①住宅確保要配慮者の入居を拒まない賃貸住宅の登録制度 ②専用住宅の改修・入居への経済的支援 ③住宅確保要配慮者のマッチング・入居支援の政策的含意について説明され、最後に、「つながる、生まれる、くらしまるごと」を自発的な活動で全体を捉えなおす（ごちゃまぜ型）視点が、今後益々必要となると述べられ、今回の講演を結ばれました。

続いてパネルディスカッションでは、「支え合うコミュニティの共創～格差と分断を越えて～」をテーマに、袖井会長より現場で活動されている3組のパネリストの方々の紹介がありました。

瑠璃川正子氏（荻窪家族創設者）は団塊世代、ご本人とご主人の両親の介護期間に、両親の発した言葉が参考になり、地域開放のスペースを兼ね備えた賃貸集合住宅「荻窪家族レジデンス」をスタートさせ、更に、多様な繋がり、力のやり取りが生まれる「百人カサロン」という場づくりに発展し、私的不動産を地域に開放されております。繋がりが生まれる「荻窪家族」という住まい方、その三年間の歩み、また今後の課題として、大家としての距離感や見守り介入の塩梅、葛藤など、ゆるやかな支え方について、そのご自身の実体験とから得た今後一について語られました。



近山恵子氏（一般社団法人コミュニティネットワーク協会）は、2007年スタートの「那須100年コミュニティ構想」の一部「ゆいまーる那須」開設8年、2018年4月より、小学校跡地に地域交流の拠点「那須まちづくり広場」を開設した沿革を説明され、コミュニティネットワーク協会が目指す、過疎再生のまちづくり、100年コミュニティについて、その実践内容と今後の課題について報告され、その中で、行政の困りごとを市民が解決する、「生涯活躍のまち」事業化について、行政と民間の連携のプラットフォームの大切さ、総合プロデュース役の民間主導のまちづくり会社の存在が大であることを力説され、今後の抱負を述べられました。



羽賀睦氏（NPO 法人ワーカーズコープ関東事業本部）、鶴飼英昭氏（千葉県佐倉市中志津町住民代表）は千葉県佐倉市中志津町における「ワーカーズコープ方式」による、高齢化率38%のコミュニティの活性化プロジェクト、具体的には今の暮らしのニーズ、10年後のニーズを踏まえた地道な調査活動の実施、住民主体のまちづくり、仕事おこしへの挑戦につい



て、自治会とワークスコープが協同で企画した仕事おこしセミナー、更に、設立準備会を重ね、中央商店街に「居場所づくり」と「仕事おこし」の拠点を設けることになった協同労働のプロセスやこのプロジェクトの現在の進捗状況について詳しく報告されました。

その後のディスカッションでは、袖井孝子会長司会で、
 ・自立は自分で考え、互助を通して、自分の力を再獲得することが大事。
 ・自分らしい暮らしを続けるには、互助、伴走するための企画、運営、支援者が必要。
 ・ネットを見ない場合の情報伝達の方法が難しい。
 ・ゆいまーる那須の地域通貨とNALCのポイント制についての説明。
 ・仲間や賛同者をどう増やしていくかが課題。
 ・専門職ほどボランティアに携わる傾向が大であること＝プロボノ等々、活発な意見交換がなされました。

最後に濱口晴彦副会長が、1970年代に話題となった「住宅すごろく」を例え話として、貸アパートを振り出しに、最後は郊外に庭付き一戸建てを買って上がりになる。当時、都市部を中心に多くの方が、すごろくの「上がり」を目指した。しかしながら現代社会では、誰もが目指す住居の「上がり」はなくなった。多様化する暮らしを柔軟に受け止めながら、地域に開かれた拠点としての住居、そして人間として何処でどう最期を遂げるのか？人それぞれ、様々な上がり方があるはずだ…という問いを会場に投げかけ、閉会となりました。

<第三部 懇親交流会>

同大学種月館 学生食堂内個室に移動し、約30数名が参加、花崎良政理事の司会で開会。袖井会長による神野 毅副会長のご紹介、その後、武者忠子理事と長田攻一理事の旧新事務局長の紹介が続き、その後も和やかな交流と歓談の場となりました。



今年度より、会場確保の為にご尽力いただいている、駒澤大学文学部社会学科教授 荒井浩道理事には深く御礼申し上げます。
 以上(中村昌子 記)

3. 秋の連続講座のお知らせ

「持続可能な超高齢社会 ～安心の未来に向けて～」

主 催	一般社団法人シニア社会学会		
会 場	駒澤大学 駒沢キャンパス 本館6階中会議室		
開催日時と講演者	2018年 9月 8日(土) 吉原 毅 (城南信用金庫顧問) 2018年10月20日(土) 笹谷秀光(株式会社伊藤園顧問) 2018年12月 1日(土) 竹信三恵子(和光大学教授)		
開催時間	各回 14:00~16:00	参加費	各回 1,000円

※ 詳細については、別添チラシをご覧ください。

4. 研究会からのお知らせ

(1) 第25回「シニアのICT活用」研究会開催のお知らせ

1) 日 時：2018年7月20日(金) 14:00~16:00

2) 場 所：(公財)ダイヤ高齢社会研究財団会議室

新宿区新宿一丁目34番5号 VERDE VISTA 新宿御苑 3階 <http://dia.or.jp/access>

3) 話題提起者：牧 壮(まき たけし) (一般社団法人アイオーシニアズジャパン代表理事)

4) テーマ：「全てのシニアをインターネットで繋ぐIoTの世界」

5) 参加費：500円

※ 参加のご連絡は、前日までに森 moriyasu@ied.co.jp までご連絡ください。
 「シニアのICT活用研究会」は、毎月第3金曜日 14:00~16:00
 ダイヤ高齢社会研究財団 会議室にて開催します。なお、8月はお休みです。

(2) 第4回「ライフプロデュース」研究会開催のお知らせ

- 1) 日 時：2018年7月20日(金) 18:00~21:00
- 2) 場 所：内幸町 日本プレスセンター内日本記者クラブ9F ラウンジ
- 3) テーマ：「今、各人が抱えている問題は何か？」について討論会
- 4) 参加費：500円

※お問い合わせは中村 (nakamura@jass.jp) までお願いいたします。

※「ライフプロデュース研究会のブログ」を開設しました。シニア社会学会のホームページ上のボタンからご覧いただくか、<http://jaas-lifeproduce.sblo.jp/> よりご覧ください。開催予定や月例会の内容を詳報しております。

(3) 第111回 社会保障研究会開催のお知らせ

- 1) 日 時：2018年7月25日(水) 18:00~20:00
- 2) 講師：込山愛郎(厚生労働省老健局 振興課長)
- 3) テーマ：「平成30年度介護報酬等改訂について」
- 4) 会 場：日本労働者協同組合連合会 会議室 東池袋1-44-3 池袋I SPタマビル8階

※ ご質問がございましたら、佐藤まで。090-4436-6853 fujiko-s@jeans.ocn.ne.jp
なお、8月はお休みです。

(4) 第57回「シニア社会のリテラシー」研究会開催のお知らせ

- 1) 日 時：2018年7月26日(木) 15:00~18:00
- 2) 場 所：早稲田大学・国際会議場4階第6共同研究室
- 3) 報告者：安田 和紘(研究会コーディネーター)
- 4) テーマ：「冊子『老いのパスポート』企画(案)」の提案と意見交換
研究会のまとめとして、濱口座長の冊子作成についてのお考えに沿い、安田コーディネーターから具体的企画(案)について、素案の提案と意見交換を行なう。
- 5) 参加費：300円

※ お問い合わせは、島村 (ken-sima1941@jcom.home.ne.jp) 迄お願い致します。

(5) 第50回「災害と地域社会」研究会開催のお知らせ

- 1) 日 時：2018年7月31日(火) 16:30~18:30
- 2) 場 所：早稲田大学戸山キャンパス 39号館6階第7会議室
- 3) 報告者：川副早央里(早稲田大学文学学術院助手)
- 4) テーマ：復興期における地域イメージの再編—災害記録・記憶の継承の活動から
- 5) 参加費：当分の間、頂戴しません。

※7月の研究会は開催時間が早くなりますので、ご注意ください。お問い合わせは、福原 (fukuhara@jaas.jp) までお願いいたします。8月は休みます。

(6) ガバナンス研究会特別企画

- 1) 日 時：8~9月で、3人以上参加で日程決定
- 2) 日 程：孺恋村鎌観音堂、郷土資料館、旧街道跡、延命寺跡、鬼押し出し園
- 3) 宿 泊：休暇村孺恋鹿沢
- 4) 内 容：江戸時代の浅間山「天明の大噴火」被災地の群馬県孺恋村で2泊し、復興して日本一の高原キャベツ村となった現地の被災地跡や資料館を訪ね、火山噴火への防災と減災をガバナンスの視点で学ぶ。
- 5) 参加費：3万円(2泊5食、資料館入場料、交通費、ガイド料など込み)
- 6) 集合・解散：休暇村孺恋鹿沢(新幹線上田駅まで無料送迎バス。東京よりマイカー分乗も可)

※申し込みは、川村 (kawamura0515@ybb.ne.jp) までお願いいたします。

(7) 第26回「シニアのICT活用」研究会開催のお知らせ

1) 日時：2018年9月21日(金) 14:00~16:00

2) 場所：(公財)ダイヤ高齢社会研究財団 会議室

新宿区新宿一丁目34番5号 VERDE VISTA 新宿御苑 3階 <http://dia.or.jp/access>

3) 話題提起者：澤岡 詩野(公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団主任研究員、当会理事)

4) テーマ：「高齢者が最後までネットを使い続けることの利点と求められる支援」

5) 参加費：500円

※ 参加のご連絡は、前日までに森 moriyasu@ied.co.jp までご連絡ください。

なお、8月はお休みです。

3. 各研究会の概要報告

(1) 第24回「シニアのICT活用」研究会の報告

1) 日時：2018年6月15日(金) 14:00~16:00

2) 場所：ダイヤ高齢社会研究財団 会議室

3) 報告者：高島雅夫(健康生きがいづくりアドバイザー、スマホ・スタディ・サークル主宰)

4) テーマ：「高齢者へスマホ普及の試み～スマホ・スタディ・サークル(SSS)を事例に～」

まず、ご自身がガラケーからスマホへ変えた過程を詳細にお話し下さった。機種選び方や通信事業者の選び方、どうやって安く、自分に合った契約をするかなど大変具体的で参考になるお話だった。

また、スマホ・スタディ・サークル(SSS)の活動では、スマートフォンを利用することにした高齢者の事例を具体的にお話いただいた。その中で、一人一人の希望を聞き取り契約すること、携帯ショップ(店員さん)の選び方など、まさにノウハウというべきお話があった。

その後、フロアとの質疑の中で、「一人一人の希望を聞き取ること」は、覚えるべきアプリを適切に選定できそれは継続して利用することに繋がるが、「聞き取ること」の難しさもあるという内容が語られた。(森記)

(2) 第3回「ライフプロデュース」研究会の報告

1) 日時：2018年6月22日(金) 18:00~21:00

2) 場所：内幸町 日本プレスセンター内日本記者クラブ9F ラウンジ

3) テーマ：「リタイア後をより良く生きるために」討論会

4) 参加者：9名 皆川、小川、庄司、三橋、寺本、若井、小平、中村、山本(敬称略)

女子3名 男子6名

この長命時代に退職や離職、子育て終了後、「人生100年時代のライフプロデュース」には何が必要なのか?新たなシニア像の創造では、どうか。研究会のコア・メンバーが議論した結果、出されたキーワードは「自立」「共生」、その二つを包括する「共(響)」の三つ。それ等を議論の根底に置き、50代から団塊の世代に後期高齢者まで異なる世代の男女8人が、ジョークを交えながらも終始真剣に自らの経験知や挑戦歴を披露し合いながら、多様な生き方のモデルづくりへと議論が進んだ。

示唆に富む2、3の実現例を一40代になって女子大に通い高校化学教師から家庭科教師にシフトチェンジしたA氏。今は退職したが広大な家庭菜園で自らが収穫した野菜類は学校の給食材料に寄贈し、地元の伝統織物の復元にも携わりながら「自然と社会との関わりを切らさず、便利さをほどほどに受け入れ、つくる喜びを楽しみたい」「今後も“一日ひと工夫”に励み、自分らしい生活環境もつくりたいな」。エンジニアだった78歳のB氏は、読み直したソクラテス著『国家』の中で「老いの道は厳しいのか?」という文章にショックを受け、“老い”の哲学的研究一筋に。まさにスキルの入替えだが、現在「老年と正義」をテーマに博士論文に挑戦中である。奥様を亡くされた孤老の日々を「徳をもって、自分らしく生きたいですね」。

もう一人は、シニア世代の働き方として注目されている複業・多業の試み（フォローシップ）を楽しんでいるCさん。「複業」は複数の仕事や活動を、どちらが主・副ではなく、状況によって力を配分できる。就業という有償労働のみならず、ボランティア活動、介護、孫育てなどの家庭内役割などに積極的に取り組む＝つまり、生産的に老いるということだ。Cさんは、約32年間勤めた民間企業を早期退職後、大学院で探求した学びを地域の実践の場で発展・展開することに挑戦、地元・市川市を拠点に「収入を得る仕事」と「地域猫活動」等のボランティア活動を両輪とし、双方をバランスよく相互作用をさせ、「シニア世代の新たな働き方（複業の試み）」をセルフプロデュースしてきた実績組。その上に、2020年に教科化される小学校の英語教育の外国語指導員の試験にも合格、4月から地元の公立小学校2校で週3日勤務し、英語が不得意な先生を補助しながら420名の児童を教えている。3カ月経った感想は「公立小学校のレトロな昭和の佇まいの校舎には、日本の将来を担う“原石”が一杯詰まっている。高学年の子らからは、もう私のニックネームのキャシー（Cathy）と呼ばれているの」とほほ笑む。シニア世代が働く意義とは、長命時代を生き抜く指針を示し、後に続く世代に希望を繋ぐことであると参加者全員が、熱心にうなずきながら耳を傾けた。

（皆川鞆一 記）

(3) 第56回「シニア社会のリテラシー」研究会の報告

- 1) 日 時：2018年6月28日（木） 15：00～18：00
- 2) 場 所：早稲田大学・国際会議場4階第6共同研究室
- 3) 発表者：薄井 滋
- 4) テーマ：「老いのパスポート Ⅲ」～日英の文芸作品に描かれる老い～

薄井さんは、第158回芥川賞受賞作の若竹千佐子著『おらおらでひとりいぐも』（河出書房刊）を読み解くに当たり、英国の文芸作品である2011年度ブッカー賞受賞作のジュリアン・バーンズ著『The Sense of an Ending』（日本語版タイトル『終わりの感覚』）を併せ読み、日英の文芸作品に描かれる「老い」を探った。作品を読み解くために「甘え」をキーワードとし、『おらおらでひとりいぐも』は、「甘え」の人間関係の中にどっぷりつかって生きてきた主人公（桃子）が「甘え」の対象を失って、一歩前に踏み出す物語として読む。一方、『終わりの感覚』には「甘え」など微塵もなく、「自律した個人」の社会の物語として読んだ。そして日本の老人問題の重要な課題として、老境期の人間関係の再構築があるのではないか。プライマリーな人間関係を代替し、自分が必要とされていると感じられる場所は「コミュニティ」かもしれない。今後の「コミュニティ」はクラブの様な存在を超えて、老人が居場所を見つけるだけでなく、他者と繋がる実感を得られる場所としての機能が積極的に求められるのではないかと結んだ。

濱口座長はコメントとして、シニア社会学会は、シニアのための学会ではなく、シニア社会という構造変化するものを視野に取り込み日日人の生きる様を考える学会であり、そこに当学会の存在価値があると述べられた。

（島村記）

◆事務局は、8月11日（土）～8月19日（日）までクローズとなります◆

一般社団法人シニア社会学会・事務局（月・水・金オープン）

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-15-5 パールビル4階

電話&FAX：(03) 5778-4728

eメール：jaas@circus.ocn.ne.jp URL：<http://www.jaas.jp/>